

比にあらず、この風一日にして歇むべきにあらば、午後より出發に決す。食事の度毎に強らるゝ大根汁にも最早飽きたれば。

風に追はれて半は走りつ、白濱もいつか過ぎて、千倉チクラの旅舎渡邊に着きしは四時を過ぎたり。今日は濱方休みにて、時經たば混み合ふべきに、早く風呂に入り給へといはるゝまゝ、急ぎ浴場さしてゆき見れば、セピアにて塗りしかと思はるゝばかりの黒き人々、狭き浴室に満ちくゝて、湯槽には脚を入れるべし透間さへなし、そが中には年若き婦人さへ混り居るに、益々呆れて脆くも退却しぬ。

十一日 晴、左に小山を、右に海を眺めつゝゆくも二里、丸山川とよべるあり。九日の雨に水嵩増して、橋は流れ、濁流岸を洗へり。籠負ひし女子共の笑ひ興じつゝ、川を涉りゆくに、他に道なければ我も足袋脚絆を解きて流れを亂しぬ、川幅二十間に餘り、寒冽たとへ難し。

ナブト波太島のほとり、思ひし程景色よからず、スケッチ一二を試み、それより道を急ぎて、鴨川、濱荻も空に過ぎ、天津の井筒屋といへるに宿る。この家取扱極めて鄭重に、枕元には水瓶にコップ、蠟燭マツチの類を置けり。

十二日 曇、小湊誕生寺を見る。鯛の浦は彼處ごと里人に教へられしが、岸よりは鮮けき鱗の影も見えず。此處より勝浦迄新道あり、興津に至る一里の間、一方は海に一方は絶壁にて、岩の質脆きためか、折々崩れ來りて行路危ふし。興津は景色よき

處なり。近海昨日より鯛の大漁なりとて、何處の漁村も鯛ならぬはなく、乾鯛にすとして砂濱に晒せるもの、恰も多摩川原に砂利の光れるがごとし。舊曆歳の暮とて、市たちて賑ひし勝浦の町を過ぎ、白鷗群れ飛ぶ御宿オンジクも跡にし、畫かまほしき景色に富む大原の海も見捨て、俣急がせて、上總一の宿に着きしは薄暮の頃なり。宿を東金屋といふ、客多くして室を得がたく、川村畫伯の親類なりといふ某辯護士と一夜を共にし、同畫伯にかゝる面白き話の數々をきしぬ。

十三日 雨、滞在。

十四日 晴、俣を雇ひて北飯塚に知人を訪ひ、大綱より汽車、夜に入て家に歸る。房州根本の湯は、既に梅花地に委し、菜の花盛りなりしが、上總は稍寒く、下總に入つてはまた花を見ず、地上雪ありて寒風膚を刺せり。春より再冬に戻れるか旅なればこそ。(終)

蛇の急所

蛇の大小に拘はらず頭から約一寸程下つた處即ち首の附け根の脈を打つてゐる處を打てば直ぐ死ぬ。

齒の毒

蝮に噛かまれたら直ぐ一番近い處を固く縛つて又少し隔つた所をもう一つ固く縛る、そして噛まれた處を突て血を抜とよい、紺氣のものは蛇の齒の毒を消すから足袋脚絆の類に紺を用ゐると痛みだけで済む、但眞紺でなくてはいけぬ。(趣味)